

坂田和人

全日本ロードレース選手権シリーズ 第5戦 2018 MFJ全日本ロードレース選手権シリーズ 第5戦 in 筑波

Mistresa・MuSASHi sc. / TC

■#99 坂田和人

RACE1 予選：9番手 (タイム：1分01秒193) 決勝：10位

RACE2 予選：13番手 (タイム：1分01秒506) 決勝：5位

茨城県・筑波サーキット (1周2.070km)

2018年6月30日(土) 公式予選・レース1 天候：晴れ コース：ドライ

7月1日(日) レース2 天候：晴れ コース：ドライ

観客動員数：9,000人 (2日間合計)

Tsukuba Circuit J-GP3

坂田和人 × Showa Denki Group

世界のレースファンを魅了したレジェンド坂田和人



全日本ロードレース選手権第5戦筑波で最大の話題と言っても過言ではなかったのが坂田和人選手の参戦だ。昭和電機株式会社は、Mistresa RT HARC-PRO. として全日本には、レギュラー参戦しているが、別プロジェクトとして坂田選手をサポートし、Mistresa・MuSASHi sc. / TCとして筑波ラウンドにエントリーした。



1994年、1998年と2度、125ccクラスで世界チャンピオンを獲得し、世界を退いてからは、後進の育成に尽力している坂田選手。今回の

参戦は、レースに臨む姿勢を次世代を担う子どもたち(教え子)に見せて欲しいという要望に応えたものであったが、坂田選手としては、4ストロークNSF250Rでレースをした経験はなかったため、納得いく状況でなければレースに出ない、というスタンスであった。それでも昭和電機としては無条件に応援させていた。

何度かのスポーツ走行、本番1週間前の参加者向け特別スポーツ走行など、限られた時間の中で4ストロークマシンを理解し、セッティングを進める姿は、世界を戦っていたときと全く変わらない。ウエットコンディションとなった特別スポーツ走行では、2番手につけていたが攻めの走りが裏目に出て最終コーナーでハイサイド転倒。全身を強く打ち、股関節を痛めてしまう。その後も痛む身体にムチを打ちながら走り続け、レースウィークを迎えていた。

初日となった金曜日は、梅雨明けが発表され、一気に気温も上昇。厳しい暑さの中でのレースウィークとなった。1本目の走行からメディアも集まり、その注目度の高さを感じさせる。そんな喧噪を余所に、坂田

選手は1本目を2番手につける。2本目でもタイムを詰め初日は4番手で終わるが、納得いく状況には、ほど遠いと語り、レースに出場するかは、この時点では、本人も決断していなかった。



今回の筑波ラウンドは、2レース制で行われ、土曜日に公式予選とレース1、日曜日にレース2というスケジュール。予選は、ベストタイム

でレース1、セカンドタイムでレース2のグリッドが決まる。坂田選手は、レース1は9番手、レース2は13番手という予選結果となり、決勝に出ることを迷っていた。このままレースに出ても順位は見えていたからだ。決勝レースの1時間前、そんな坂田選手の背中を押したのは、ハルルク・プロ本代会長だった。「レース1だけ出てみて、その結果を踏まえてレース2を考えてみればどうか？」と…。



そして坂田選手の姿はグリッドにあった。同時代を戦ったライダーたちが激励に訪れ、ファンは、その様子を見守る。レース1は、坂田選手の予想通りの展開となり、10位でゴール。その後、レース2に向けたミーティングを終えるとMotoGP™中継の解説のため日テレに行き、夜中にホテルに戻るというハードスケジュール。

レース2に向けては、マフラーから来る熱によりリアアサスペンションが思うように機能してくれていなかったと判断し、急ぎリアアサスペンションをノーマルからオーリンズ製に変更。この大きな決断の理由には、阿部メカニック(1994年世界チャンピオン獲得時担当)が駆けつけてくれたことにより、実弟の坂田明彦メカニック(1994・1998年世界チャンピオン獲得時担当)、佐々木メカニック(1998年世界チャンピオン

獲得時担当)がそろい、やっと本来のあるべき体制となったことが大きかった。

決勝日朝の僅か15分のウォームアップ走行で、走りもよい流れをつかむことができ、レース2までにも、さらにセッティングの変更を行い、レース2に臨むことになった。



レース2では、スタート直後に多重クラッシュが発生。坂田選手も、影響を受けたもののギリギリ回避していた。このアクシデントで20周から13周に減算され再スタートが切られた。懸命に作業してくれたメカニックのおかげもあり、レース中盤までトップグループが見える位置で周回。最終ラップの1コーナーで前を走っていたライダーが転倒したため、一つポジションを上げ5位でチェッカー。13年振りの実戦とは思えない、すばらしい走りに拍手は、鳴り止まなかった。

■坂田和人選手コメント

「まずは無事に走り終えることができホッとしています。今回の参戦で次世代を担う子どもたち(教え子)が、どう感じてくれたかは、私自身は分かりかねますが、今回のレースを通じて、諦めずに精一杯やり通すことの重要性が彼らに伝わっていたら幸いです。レースでは、過去の教え子たちとも一緒にレースができましたし、成長している姿を見られたのは、とてもうれしかったですね。限られた環境の中では、精一杯やれたという気持ちです。その反面、もっと環境を整えることができれば、さらに上位を走れたという気持ちが交錯しています。世界GPを退いてからも“引退”という言葉は一度も口にしていないので、これからも生涯現役です。今回のレース参戦において、まだまだ勉強すべきことが、たくさんあると感じ、とてもいい経験ができました。柏木社長を始め昭和電機の皆さん、本代会長を始めハルルク・プロの皆さん、そして応援してくださったすべての皆さんのおかげです。本当にありがとうございました」